

ポラリスを仰ぐ北の大地から

連携雑感

石狩医師会 会長 立石 圭太

先日、当市の地域ケア会議において医療介護連携のテーマで座談会の発言者を依頼され引き受けざるを得なくなった。医療と介護をコーディネートするための複数の拠点を持ちながら、当市の医療介護連携の現状は毎年スタートラインに立つものの走り出すことなく時間を重ねている。初夏の日曜日、ビールを飲みながらベランダに遊びに来たカラスと医療介護連携について久しぶりに考えてみた。

個人的には当医師会員数名と多職種10名程とで月1回の会合を5年間継続し自分たちが関わる看取りや困難事例を話し合う環境があり、手が届く範囲の連携には現状では不便を感じていないものの地域全体の要求にこたえる容量は持ち合わせていないため、地域全体の連携話に巻き込まれることになってしまうようだ。

医療介護連携の話をする時にいつも思うことがある。行政の決まり事で医療介護連携を誘導しても別々の教育を受けた多職種や別組織の集まる現場は法律だけでは動けないし、顔が見える連携が必要と声高に叫ばれあちらこちらで名刺交換が行われているが、連携相手と多少とも信頼関係がなければ現場が成り立つとは思えない。北海道医報の12月号（第1167号）“ポラリス”に赤平市医師会の郡先生が“医師会の人間関係がその街の医療レベルを上げることに気がつき”と寄稿されていた。同じように医療介護の連携においても役割分担ではなく信頼できる人間関係を作ること同時進行しなければと考える。私のような世代の信頼関係の構築といえば、学生時代から酒を呑み同じ事例を分かち合いそれぞれの想いを口にする方法しか思いつかず、思わず手元のグラスを飲み干すことになる。

以前カラスが自分に餌をくれる人間と友好関係を築くため自分の宝物の金属部品などをお礼として届けるニュースがあり、私の庭のカラスも時々訳のわからない物を置いていくことを繰り返している。

最近の若い人たちは呑みニケーションが苦手と聞いているが、カラスを見習いもう少し地域の介護職との信頼関係を築きたいものである。

光陰矢の如し

恵庭市医師会 会長 島田 道朗

先日、午後の外来の最中、看護部長が診察室にやってきて「先生、お話があるので、夕方五時に医局に伺ってよろしいでしょうか？」と真顔で言ってきた。「いいけど。また何かあったのかい？今でもいいよ、すごく気になるから」と私。「いや、五時にして下さい。それではお願いします」と、さっさと出て行ってしまった。不吉な予感がする。経験上、だいたいこういう時は、揉め事が起きたとか、クレームがあったとか、ろくなことがないのである。

落ち着かないままに夕方五時、看護部長が医局にやってきた。一瞬身構えたが、その手には赤いチャンチャンコと赤い帽子。ア～やられた（絶句！）。

還暦のお祝いは、家族と札幌で食事をして簡単に済ませていたし、その日は誕生日でしたが、たまたま当直ですっかり忘れていたところに不意打ちをくらいました。さて、嫌々ながらもチャンチャンコを着て一階の食堂に連れて行かれ、盛大にお祝いをしてもらいました。最後に赤い座布団に座らされ、記念写真を撮り、照れくさいやら恥ずかしいやらで汗だくでした。

還暦になったということはさておき、60年が飛ぶように過ぎたと感じるのには少々驚きを覚えます。小学校の夏休み、一日が永遠に続くように思えました。今、週末は、まどろんでいるうちに終わってしまいます。ある心理学者は、年とともに記憶に残るような新しい体験が少なくなり、ルーティンの動作が増え、脳に書き込まれる情報が減ることで、時間の経過を速く感じるようになると言っています。脳に書き込まれる情報とは、新しい体験の記憶です。年寄りの冷や水と言われようとも、何か新しいことにチャレンジすることが、時の流れを遅くする方法なのかも知れません。

Time flies, just do it!

